糸電話

LAYBACK

糸電話

　今晩は。
　月のきれいな夜だった。
　空気もよく澄んでいて、いつにもまして彼女の声が心地よく耳に響いた。

　僕は山の上に、彼女はふもとの村に暮らしている。
　連絡手段はと言うと、唯一、ご先祖様が苦労して通してくれた糸電話があるだけだ。
　ただし回線は一本しかない。そしてそれは村の長老の家に繋がっていた。
　彼女は夜になると、わざわざ長老の家を訪れて、僕に電話をかけてきてくれる。
　おかげで僕たちは毎晩、五分間だけ話をすることができた。

　僕としてはもっと長い時間彼女と話をしていたかったのだけれど、慎み深い彼女は長老に迷惑をかけるわけにはいかないと言って、いつもきっかり五分でおやすみの言葉を口にした。

　村人思いの長老のことだ。時間なんて気にも留めていないはずだよ。
　僕がそう言っても、けっして彼女はゆずらなかった。
　まぁ彼女のそんなきちんとしたところも僕は好きなんだけどね。

　聞いて。今日はね。こんなことがあったのよ。
　ああ。彼女のやわらかな声がざらついた僕の心を癒してくれる。
　他愛のないおしゃべりでもオチのない話でもなんでもよかった。
　そう。彼女の声さえ聞くことができれば。

　おっといけない。目を瞑って聞き惚れている場合じゃなかった。
　ほらほら、ぼんやりしてると時間がきてしまうよ。
　ついには月にも急かされて、僕はこの日いちばん彼女に伝えたかったことを口にする。

　実はね。山で採れた碧の石で指輪を作ったんだ。それを君に贈りたいと思う。
　ありがとう。とってもうれしいわ。彼女の声がひときわ明るくなる。
　でも、いったいどうやって送るの？

　彼女の疑問も当然だった。険しすぎるこの山には郵便山羊も登ってこれない。
　食料や身の回りのものは完全に自給自足だったし、なにしろ僕自身、この山を下りたことが一度もなかったのだから。
　（ではどうやって彼女と知り合ったのかって？　まぁそれはご想像におまかせするとしよう）

とにかくさ。受け取ってほしいんだ。
もちろん、ありがたくいただくけど――
そのまま、少しだけ待ってて。
ええ、分かったわ。
そう答えてはくれたものの、彼女はまだ腑に落ちていない様子だった。

まぁ見ててくれ。
慎重に糸から受話器を取り外す。月明かりに照らされた銀色の導線にそっと指輪を通す。
重力という命を吹き込まれた指輪は、さーっと走りはじめる。僕は受話器をふたたび糸に繋いだ。

夜空をまっすぐ駆け抜ける碧色の光線に月も星も息を呑む。
虫のささやきも、木々のざわめきも、小川のせせらぎも、すべての音が消え去って、世界は静寂に包まれる。

さぁ耳を澄ませ。

やがてコツリと音が鳴り、おやすみの代わりに彼女の歓声が響いた。

追記

ブログでショートショートや掌編小説を書いています。よろしければそちらもどうぞ。

http://cab10.seesaa.net/